北欧＝幸せのものさし

障害者権利条約のいきる町で

第8回　貧民街の希望の学校

文・写真　薗部英夫
全国障害者問題研究会事務局長

学習障害児の学ぶコペンハーゲン市営の国民学校・エングスコーレンをこの秋再訪した。学校には歴史がある。

◆

1848年、ヨーロッパは革命のなかにあった。フランスやドイツで絶対王政は倒れた。マルクスは『共産党宣言』を発表。イタリア統一、ハンガリー、チェコ、ポーランドが揺れる。

デンマークでは、当時の人口で10人に1人が参加した1万5千人デモを契機に王政が放棄され、翌年に憲法が成立する。以後、グルントヴィらのフォルケ・フォイスコーレ（国民高等学校）運動により、農民の連帯と労働運動によって、民主主義と福祉国家への道を歩み始める。

学校の玄関には、「1895」とある。革命から50年。市の人口は15万人から現在に近い50万人に激増している。大半は貧しい工場労働者だ。この学校は、1200年前、スラム街の貧しい家庭の子どもたちに教育を！　と一人の女性が開設したそうだ。

学校に行けば、食堂があり、勉強も教えてくれる。そして時が過ぎ、軽度の障害児の学ぶ市営の学校になった。

糸賀一雄らが創設した近江学園も、戦災孤児といわれた子どもたちを貧困から救い、「腹をくちく」することがねがいの一つだった。そのなかには、当たり前のこととして知的障害児もいた。

コペンハーゲン中央駅裏の貧民街につくられたこの学校も、敗戦後の滋賀の近江学園も、その根底にある思想は、地下茎でつながっているようだ。すべての子どもには教育を受ける権利があり、それを社会は実現する責任がある。

◆

デンマークの国民学校は、0年生から9年生までの10年の義務教育だ。インクルーシブ教育が実施され、特別学校の割合は減り、特別学級も縮小の方向だが、賛否両論がある。特別学級には3、4倍の費用がかかる。経費削減のための施策ではないかとの批判もあるそうだ。

新校長のマリアが全体を解説し、授業参観後、給食を食べながら、さまざまな質問にこたえてくれた。

＊

30年前、この場所に移転して「エング（野原の意味）スコーレン」になりました。特別学校としてのレイアウトを考えて改修し、教室は大きなスペースで、各部屋にキッチンをつくりました。

今は、理念も変わり、生徒たちのタイプも変わりました。間仕切りのボードやカーテンがあり、広くなく、狭いスペースで落ち着いて学べるように工夫しています。来年は大規模な改修をします。

ここには、学習障害児が100人通っています。IQは40～80。ADHDや自閉症などの子もいます。60％が17カ国からの移民の子です。保護者の多くは生活保護などを受けて生活しています。

教師は21人。加えて4人の母国語（ソマリア・アラビア・トルコ語）教師。ペタゴー（生活支援員）が3人。今年8月1日から学校教育法が改正され、ペタゴーが学校で働くようになりました。

1クラスは6～7人。友だちづくりが大切ですから規模が小さいです。意図的に15～20人グループでの授業もします。また、デンマーク語（国語）・算数・英語の3教科はとりわけ重視しています。

◆

改正学校教育法の影響がどうなり、それをまたデンマークはどう修正していくのか興味はつきないが、インクルーシブ教育についてこの学校では、インクルージョンの対象は、「障害」なのですか？「文化」なのですか？　それとも両方なのですか？　と聞いた。

マリア校長。「いろんな文化的背景をもつ子どものインクルージョンです。移民の子らはそれほど知的面での困難は少ない。デンマーク語に難があるため力が発揮できないのです」。

◆

授業を参観したのは8歳～13歳の7名が学ぶ国語＋英語クラス。それぞれ微妙に違う教科書を使って、書くこと、しっかり話すことが重視されていた。

自己紹介で「今日は、わたしの誕生日です！」と言うと、みんなで一緒に「ハッピバースデイ」を歌ってくれた。

＊

仲間と学び、仲間とおもいきりあそぶ。子どもは宝＝未来だから、社会は、できるかぎりお金も人材も投入する。子どもたちの歓声がまぶしかった。

①学習障害児の学ぶ国民学校・エングスコーレンの国語の授業

②校庭は狭いけれど歓声がいっぱいだ

③学校は120年の歴史がある

④マリア校長は希望を語る